

学位論文要旨

現代的なリズムのダンス授業の学習指導に関する研究
ーステップ習得学習に着目してー

広島大学大学院 教育学研究科
文化教育開発専攻

D104443

高田 康史

論文題目

現代的なリズムのダンス授業の学習指導に関する研究

ーステップ習得学習に着目してー

論文構成

序章

- 第1節 緒言
- 第2節 本研究の目的および課題

第1章 現代的なリズムのダンス授業における定型の運動習得学習と自由な運動学習の比較（研究1）

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第2章 現代的なリズムのダンス授業におけるステップの難易度（研究2）

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第3章 現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習の有効性と課題（研究3）

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第4章 ステップ習得学習を含む現代的なリズムのダンス授業における発展的な学習内容（研究4）

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

終章

- 第1節 総括
- 第2節 本研究の成果と今後の課題

引用・参考文献

論文要旨

序章

第1節 緒言

平成20年の中学校学習指導要領（文部科学省，2008a）において、「保健体育科の授業時数を90時間から105時間に増やすとともに、中学1・2年生において武道、ダンスを含むすべての領域を男女必修とする」という改訂が示された。ダンス領域の授業を創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスから選択して履修させることは従前と同様であるものの、男女必修化を機に武道とダンスの学習内容をめぐって議論が高まっている。

わが国のダンス教育において、戦後のダンス教育が模倣を否定してきたという歴史的背景（松本，2012）から、自由や即興性が重んじられてきた。現代的なリズムのダンスは、ロックやヒップホップなどのリズムに乗って踊るダンスであり、「リズムの取り方や動きを工夫したり、相手と自由にかかわり合い感じあって踊るのが楽しいダンス」である。その技能目標には、「即興的に自由に踊る」という意味合いが含まれている（文部科学省，2008b；村田・高橋，2009c）。しかし、現代的なリズムのダンス授業には指導方法の二極化がみられ、それが議論の的となっている。つまり、学習指導要領解説が示す自由な運動学習と定型の運動習得学習（中村，2012）の狭間で、リズム系ダンスの学習指導が二分されているのである。

先行研究や指導資料を概観すると、自由な運動学習に関しては、その学習成果や教育的意義に関するエビデンス不足から学習内容の薄さが指摘されており（土井ら，2007；松本，2012）、自由な運動学習に関する実証的検討が急務であると考えられる。その一方、定型の運動習得学習に関しては、学習者の心理的な好影響は確認されているものの（内山ら，2013；内山ら，2012；内山ら，2011；内山，2007；小島，2006）、その実践内容が動きの習得に終始していることから、定型の運動習得学習においては、即興的パフォーマンス技能の向上をねらいとした学習内容の実証的検討が課題として残されている。

第2節 本研究の目的および課題

中学校1・2年生において武道、ダンスを含むすべての領域が男女必修となり、ダンス学習全般についても「いつ、何を、どう身につけさせるのかを明確にしていくこと」（相馬，2011）や、「系統的な内容の整理」（片岡，2000）が課題とされるなか、特に、「現代的なリズムのダンスの充実がダンス領域全体の充実化につながる」（相馬，2011）ともいわれ、中学校保健体育科における現代的なリズムのダンス授業の学習指導に関する実証的検討は急務であると考えられる。

そこで、本研究では、中学校保健体育科における現代的なリズムのダンス授業の学習指導における系統的な内容の整理をするため、定型の運動習得学習、特にステップ習得をもとにした学習（以下、ステップ習得学習）に着目し、その有効性や妥当性について実証的に検討することを目的とし、以下の3点を具体的な研究課題とする。

1つ目の課題は、ステップ習得学習と自由な運動学習に関する比較検討を行い、ステップ習得学習の有効性や課題について検証することである（研究1）。

2つ目の課題は、中学校保健体育科における現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習の学習内容についてより詳細に検証することである。基礎的なステップ技能の習得状況を分析し、基礎ステップの難易度分類を試み（研究2）、さらに、即興的パフォーマンスおよび運動有能感の観点から、ステップ習得学習の有効性や課題を明らかにすることである（研究3）。

3つ目の課題は、課題2の授業モデルからより発展させた現代的なリズムのダンス授業モデルを計画し、現代的なリズムのダンス授業モデルに関して実践的に追検証することである（研究4）。

第1章 現代的なリズムのダンス授業における定型の運動習得学習と自由な運動学習の比較（研究1）

第1節 研究目的

本研究においては、現代的なリズムのダンス授業における定型の運動習得学習（以下、ステップ習得学習）と自由な運動学習の比較検討により、ステップ習得学習の有効性や妥当性について検討することを目的とした。

第2節 研究方法

対象は大学生12名であり、以下の2群による実験授業を比較検討した。すなわち、ステップ習得学習を中心とした実験授業（以下、ステップ群）では、生徒はヒップホップダンスを例にした9つのステップを習得し、各授業の最後に見せ合いの学習を行った。一方、自由な運動学習を中心とした実験授業（以下、自由群）では、中村(2011)、村田(2012b, 2002)を参考に授業計画を立案し、生徒はくずしのポイントを理解しながら、音を感じたまま自由に踊ることを中心に学習を行った。調査内容は、ダンスに対する意識、形成的授業評価（高橋, 2003）、即興的パフォーマンス技能の3項目であった。

第3節 結果

まず、ダンスに対する意識に関して、ステップ群においては、「楽しさ」、「自信」、「好嫌度」、「即興に対する自信」で、有意な値の上昇がみられた。一方、自由群においては、「即興に対する自信」の項目において有意な値の上昇がみられた。次に、形成的授業評価に関して、両群ともに実験授業4回目終了時はいずれの項目においても評定が5点であった。さらに、即興的パフォーマンス評価得点に関して、ステップ群において「オリジナリティ」、「体の使い方」、「音との同期」、「動きの種類」、「リズムの変化」で有意な値の上昇がみられた一方、自由群において有意な変化はみられなかった。

第4節 考察

まず、学習内容に関して、ステップ群の学習内容がダンスに対する意識に好影響を与える可能性が示唆された。次に、形成的授業評価の結果より、両群ともに自己の成果の捉え

方に大差はなかったと考えられる。さらに、即興的パフォーマンス評価得点の結果より、ステップ群において全ての項目で実験授業後に有意な上昇を示した。一方、自由群においては、「リズムの変化」以外のいずれの項目にも好影響はみられなかった上、「体の使い方」に関しては得点が有意に減少していたことから、自由な運動学習のみの学習内容では、生徒は即興的に踊るための体の動かし方を理解し習得することができず、必要な技術が生徒に教授されない可能性があると考えられる。以上のことから、両実験授業ともに形成的授業評価の結果に大差はなかったものの、ダンスに対する意識や即興的パフォーマンス技能に関しては、ステップ習得を中心にした学習を行ったステップ群の方に好影響を及ぼすことが明らかとなった。

第2章 現代的なリズムのダンス授業におけるステップの難易度（研究2）

第1節 研究目的

本研究においては、仮説的に計画された授業モデル1の実践を通して、現代的なリズムのダンス授業におけるステップの難易度について検討することを目的とした。

第2節 研究方法

対象は中学2年生男子37名であった。ヒップホップダンスを例にした授業モデル1の単元計画において、単元前半（2時間目から7時間目）の各回で、一斉指導型の方法でステップ習得学習を行い、各授業の最後に見せ合いの時間を設けた。ステップについては、研究1と同様であった。調査内容は、ステップ習得成果における熟練者評価について（ステップ習得成果得点）、ステップ習得成果における自己評価について（自己評価得点）の2項目であった。

第3節 結果

まず、ステップ習得成果得点とステップの難易度に関して、「ボックス」、「スマーフ」、「サイドステップ」、「スライド」、「ポップコーン」と「バックランニングマン」、「2ステップ」、「クラブ」、「ランニングマン」の間には有意な差がみられた。また、「バックランニングマン」と「クラブ」、「ランニングマン」の間には有意な差がみられ、「2ステップ」、「クラブ」と「ランニングマン」の間にも有意な差がみられた。次に、ステップ習得成果得点と自己評価得点の関係に関して、「クラブ」、「ランニングマン」では熟練者評価より自己評価において有意に値が高かった。

第4節 考察

ステップ習得成果の実証的検討より、授業モデル1で採用したステップについて、難易度を大きく2つに分類することができた。すなわち、中学生にとって比較的習得が容易な入門ステップとして、「ボックス」、「スマーフ」、「サイドステップ」、「スライド」、「ポップコーン」を位置づけ、比較的習得が難しい挑戦ステップとして「バックランニングマン」、「クラブ」、「2ステップ」、「ランニングマン」を位置づけた。なお、「クラブ」、「ランニングマン」については生徒が未習得であるにも関わらず、「習得できた」と評価する傾向のみ

られるステップであることも明らかとなった。

第3章 現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習の有効性と課題（研究3）

第1節 研究目的

本研究においては、授業モデル1の実践を通して、現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習の有効性と課題について、実践的に検討することを目的とした。

第2節 研究方法

対象は中学2年生男子37名であった。実践した授業モデル1の単元計画は、研究2と同様である。本研究における調査内容は、即興的パフォーマンス評価得点、運動有能感（岡澤，1998）の2項目であった。

第3節 結果

即興的パフォーマンス評価得点に関して、クラス全体の結果をみると、いずれの項目においても有意に値が上昇していた。しかしながら、単元前技能上位群では「オリジナリティ」、「音との同期」の2項目において有意な変化はみられなかった。また、運動有能感の変化に関して、「統制感」因子については、単元前運動有能感下位群において「練習をすれば、必ず技術はのびると思います」という項目で有意な値の上昇がみられた。さらに、「受容感」因子については、単元前運動有能感下位群において、「運動をしている時、先生が励ましてくれたり応援してくれたりします」という項目で有意な値の上昇がみられた。

第4節 考察

即興的パフォーマンス評価得点の検証より、ステップ習得学習を行うことの有効性については、研究1と同様であったと考えられる。また、運動有能感の検証より、授業モデル1においては、特に、単元前運動有能感下位群において運動有能感の「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」に関する項目の一部で有効性がみられたものの、課題は多く残された。すなわち、ステップの習得に重点を置きすぎると、一斉指導、いわゆるダンスレッスン形式の時間が長くなり、生徒同士の関わりの時間が相対的に短くなることから、ステップ習得の効果をふまえて、生徒同士の関わりを増やす工夫を授業の中に取り入れることが必要であると考えられる。加えて、生徒を見本として活用することや、難しいステップへの挑戦の時間を確保することなどが課題としてあげられ、これらの点に対して改善の余地が残された。

第4章 ステップ習得学習を含む現代的なリズムのダンス授業における発展的な学習内容（研究4）

第1節 研究目的

本研究においては、授業モデル1の課題（研究2、研究3）をふまえて、より発展的な現代的なリズムのダンスの授業モデル2の実践を通して、ステップ習得学習の配当時間の妥当性や学習内容の発展について、より詳細に追検討することを目的とした。

第2節 研究方法

対象は中学2年生男女40名であった。授業モデル2の単元計画については、授業モデル1の課題（研究2、研究3）を受けて以下の点を変更した。まず、ステップ習得学習の配当時間については、研究2の授業モデル1の6時間から、授業モデル2では3時間へと短縮し、ステップ習得数も9種類から7種類へと削減し、「ボックス」、「スライド」、「サイドステップ」、「バックランニングマン」、「スマーフ」、「ポップコーン」、「2ステップ」の順に配列した。さらに、授業モデル2の5時間目から7時間目には、習得したステップを活用するためのダンスセッションや即興活動などを取り入れ、生徒同士がダンスを通して関わり合う交流学习を中心に学習内容を設定した。調査内容は、ステップ習得成果得点、即興的パフォーマンス評価得点、運動有能感（岡澤，1998）、形成的授業評価（高橋，2003）、学習ノートの自由記述の5項目であった。

第3節 結果

まず、ステップ習得成果得点に関しては、「バックランニングマン」、「ポップコーン」、「2ステップ」、「スライド」、「スマーフ」において授業モデル1の7時間目（ステップ習得後）が授業モデル2の4時間目（ステップ習得後）より有意に値が高かった。また、「バックランニングマン」、「2ステップ」において授業モデル2の7時間目（交流後）が授業モデル1の7時間目（ステップ習得後）より有意に値が高く、「ポップコーン」においては授業モデル1の7時間目（ステップ習得後）が授業モデル2の7時間目（交流後）より有意に値が高かった。また、有意差のみられなかった「ボックス」、「スライド」、「サイドステップ」、「スマーフ」においては、7時間目の時点で両実践の平均得点がいずれの項目においても天井値に近い値を示した。次に、即興的パフォーマンス評価得点に関して、「オリジナリティ」、「リズムの変化」、「体の使い方」、「音との同期」の項目については、授業モデル2の7時間目（交流後）の方が授業モデル1の7時間目（ステップ習得後）より有意に値が高く、「動きの種類」については、授業モデル2の7時間目（交流後）の方が授業モデル1の7時間目（ステップ習得後）より有意に値が高かった。次に、運動有能感の変化に関して、単元前運動有能感下位群において全ての因子で有意な値の変化がみられた。因子別にみると、「身体的有能さの認知」因子においては、単元前運動有能感下位群の「運動について自信を持っているほうです」、「運動の上手な見本として良く選ばれます」の項目において、有意に値が上昇していた。「統制感」因子においては、単元前運動有能感下位群のすべての項目において、単元後、有意に値が上昇していた。「受容感」因子においても、単元前運動有能感下位群のすべての項目において有意に値が上昇していた。また、単元前と単元中（ステップ習得学習後）の間では、単元前運動有能感下位群の「一緒に運動しようと誘ってくれる友達がいます」の項目において有意に値が上昇していた。次に、4番目の形成的授業評価に関して、評定は2時間目以降、「成果」が4～5点を推移、「意欲」は単元終了まですべての時間で4点、「学び方」は4～5点を推移し、「協力」は単元終了まで5点であった。さらに、ステップ習得学習時の学習ノートの自由記述（479件）において、記述件数が最も多かったのは「ス

テップ」に関する記述であり、次いで「できる」、「腕の使い方」、「難しさ」、「楽しさ」、「恥ずかしさ」、「リズムに乗る」などであった。交流学习時の学習ノート（379件）において、記述件数が最も多かったのは「楽しさ」、次いで「生徒同士の関わり」、「緊張」などであり、ステップ習得学習時と比較して記述件数は少ないものの、生徒の気づきの範囲はより拡大されたことが明らかとなった。

第4節 考察

ステップ習得成果得点からみたステップ習得学習の時間配分と習得順序について検討した結果、7つのステップを学習した後の交流学习時に、習得したステップを活用することを通して、ステップの習得度合いをさらに増すことができたと考えられる。研究2と研究3から、ダンス初心者である中学生の場合、1時間当たり2～3個のステップを習得することが可能であり、さらに交流学习を充実させるためにも、ステップ習得学習の配当時間は2～3時間程度とすることが妥当であること、ステップ習得学習後の交流学习においても生徒のステップ習得の度合いは増すことなどが明らかとなり、これらのことから、ステップの選定や配列順序については、生徒の興味関心や既習事項、発達段階に応じて設定していくことが重要であると考えられる。また、ステップ習得学習において生徒が「わかる」ことを通して「できる」ようになるためにも、学習ノートなどを活用し、ステップ習得の際にステップに関する技術ポイントを理解させながら指導していくことの有効性も示唆された。また、即興的パフォーマンスに関する検証結果より、中学生ダンス初心者にとって、即興的パフォーマンスの成果を上げるには、自由な運動学習よりも授業モデル1（ステップ習得学習）の方が、さらには授業モデル2（ステップ習得学習から交流学习へ）の方がより有効であり、その妥当性が示唆された。続いて、運動有能感に関する検証を行った結果、単元前半のステップ習得学習場面において適切な技能の課題を示すことにより「統制感」が高まり、生徒を見本として活用することにより「身体的有能さの認知」が高まり、さらには、交流学习の中での生徒同士の関わり合いが深まることにより「受容感」も高まることなど、運動有能感への好影響が明らかとなった。さらに、形成的授業評価の結果から、授業モデル2においては、ステップ習得学習の後に交流学习を取り入れることにより、中学校保健体育科の授業として一定の教育的な意義を確保できる実践であると同時に、生徒同士が「協力」して活動できる実践であることが実証されたと考えられる。最後に、学習ノートの自由記述からも、授業モデル2は、ステップ習得学習の後に交流学习を取り入れることにより、「楽しく」しかも「生徒同士の関わり」を感じる実践であったと考えられる。

終章

第1節 総括

本研究では、中学校保健体育科における現代的なリズムのダンス授業の学習指導における系統的な内容について、定型の運動習得学習、特にステップ習得をもとにした学習（以

下、ステップ習得学習)に着目し、その有効性や妥当性について実証的に検討することを目的とし、以下の3点を具体的な研究課題とした。

1つ目の課題に関して、ステップ習得学習と自由な運動学習に関する比較検証の結果から、ダンスに対する意識や即興的パフォーマンスの技能に関して、ステップ習得学習の方が好影響を与えることが明らかとなり、その有効性が示唆された。

2つ目の課題に関して、中学校保健体育科における現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習の内容に着目した授業モデル1の検証結果から、入門ステップと挑戦ステップを分類することができた。一方、即興的パフォーマンス評価や運動有能感に関する有効性はみられたものの、課題が多く残された。すなわち、ステップ習得に重点を置きすぎると、一斉指導、いわゆるダンスレッスン形式の時間が長くなり、生徒同士の関わりの時間が相対的に短くなることから、ステップ習得の効果をふまえ、生徒同士の関わりを増やす工夫を授業の中に取り入れることの必要性が示唆された。

3つ目の課題に関して、授業モデル1をさらに発展させた現代的なリズムのダンスの授業モデル2による追検証の結果から、ダンス初心者である中学生の場合、1時間当たり2～3種類のステップを習得することが可能であり、さらに交流学习を充実させるためにも、ステップ習得学習の配当時間は2～3時間程度とすることが妥当であると考えられた。また、ステップ習得学習後の交流学习においても生徒のステップ習得の度合いは増すことや、ステップ習得学習から交流学习へと展開する学習内容は、即興的パフォーマンスの成果を上げるために有効であることなどが示唆された。さらに、運動有能感に関しても、特に単元前運動有能感下位群において好影響を与えることが明らかとなり、この点においても有効性が示唆された。また、以上のことから、学習ノートの自由記述の分析・考察からも実証されたものと考えられる。

第2節 本研究の成果と今後の課題

本研究においては、中学校保健体育科の現代的なリズムのダンス授業におけるステップ習得学習に着目し、その有効性や妥当性を明らかにすることにより、現代的なリズムのダンス授業を再構築する第一歩にしたいと考えた。本研究の成果であるステップの難易度分類については、中学生を対象として実証的検討を重ねたものであり、学校体育現場に有益な情報を提供することができるものであると考えている。また、自由な運動学習よりもステップ習得学習がより教育的な成果をあげることができるということだけではなく、ステップ習得学習をもとにした交流学习へと向かう学習内容の有効性も実証することができたと考えられる。本研究におけるこれらの成果は、現代的なリズムのダンス授業の課題解決へ向けての第一歩であり、体系化の礎となる検証になったと考えられる。

今後の課題として、まず、本研究において検討されたステップの難易度分類をもとに、ステップの技能面に関して、リズムの取り方、体の方向、キックやホップなどの動きとの関連、接地足などに焦点を当てた運動学的な分析・分類を試みることにより、易から難へという原理をふまえつつ、ステップの系統性を考慮したステップ習得学習の配列順序につ

いて継続的に検討していく必要がある。また、上肢の動きとの関連によるヴァリエーションの拡大に焦点を当てた技能に関する実証的検討も必要である。さらに、本研究は現代的なリズムのダンス授業の単元前半に焦点づけたものであったが、定型の動きにとらわれずオリジナリティを追求していくことが、交流学习のみならず作品づくりにおいても重要であり、ステップ習得学習が単元後半の作品づくりに及ぼす影響についても実証的検討を重ねていきたい。

引用・参考文献

- 浅野愛美・熊谷佳代 (2011) 中学校ダンス必修化に対応した「現代的なリズムのダンスの教材開発. 岐阜大学教育学部研究報告. 教育実践研究, 13 : 55-67.
- California State Board of Education (2005) Physical Education Model Content Standards for California Public Schools Kindergarten Through Grade Twelve, California Department of Education.
- 中央教育審議会 (2006) 初等中等教育分科会 教育課程部会審議経過報告.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.html/
2014年8月27日現在)
- Collen, N. W. (2005) Introducing Improvisational Skills through Rhythm Tap. JOPERD, 76(7) : 38-39, 45.
- ダンスインストラクター協会 (2012) みるみる上達する！ストリートダンストレーニング. 日東書院, 東京都.
- 土井涼子・川口千代 (2007) 「表現運動」における動きの内容別比較研究「表現」と「リズムダンス」を参考に. 京都教育大学発達教育学部紀要, 3 : 65-75.
- Finnish National Board of Education (2004) NATIONAL CORE CURRICULUM FOR BASIC EDUCATION 2004, Vammalan kirjapaino Oy.
- 福田誠治 (2005) 競争やめたら学力世界一 フィンランドの教育の成功. 朝日新聞社, 東京都.
- 井上さくら (2012) たのしいHIPHOPダンス入門. ベースボールマガジン社, 東京都.
- 入口豊・井上功一 (2009) フィンランドの体育カリキュラム改革 (I). 大阪教育大学紀要 第V部門, 58(1) : 57-68.
- 岩田靖 (2010) 体育の教材・教具論. 新版体育科教育学入門, 大修館書店, 東京都 : 54-60.
- 片岡康子 (2000) 日本体育学会 50 回記念大会シンポジウムから 生涯学習社会におけるダンス学習を考える. 体育科教育, 48(1) : 38-41.
- Kassing, G. and Jay, D. M. (2003) Dance teaching methods and curriculum design : Comprehensive K-12 dance education. Champaign, ILL : Human kinetics.

- The Kennedy Center HP” ARTS EDGE” Dance Content and Achievement Standards. (<http://artsedge.kennedy-center.org/educators/standards/national/arts-standards/collections/by-art-form/dance-standards.aspx>/2014年8月27日現在)
- 菊池由見子 (2012) オールカラー版 DVD 付き中学校ダンス指導のコツ. ナツメ社, 東京都.
- 小島理永 (2006) 体育授業におけるフロー体験—ストリートダンスを教材として—. 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 27 : 27-36.
- 国立教育政策研究所 (2003) 体育のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—. 「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究結果報告書 (14) , 国立教育政策研究所.
- 国立教育政策研究所 (2009) 教科書制度と教育事情. 第3基科学技術基本計画のフォローアップ「理数教育部分」に係る調査研究, 国立教育政策研究所 : 11-70.
- Lai K.L. (2011) Dance Education. *Teaching and Learning in Physical Education*, 53-64.
- Lewis, L. (2012) The Philippine “Hip Hop Stick Dance”. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*, 83(1):17-21.
- 前田理子 (2010) これからチャレンジする超初心者のための HIPHOP ステップ集. 民衆社, 東京都.
- 松本富子 (2012) 学校におけるダンス教育の変遷を辿る—日本の文化的特質の中に萌芽し発展したダンスの教育—. *体育科教育*, 60(2) : 10-13.
- 松尾千秋・高田康史・車春紅・矢野下美智子 (2013) 『女子体育』誌にみるリズムダンス・現代的なリズムのダンスのダンスに関する記述の動向と今後の課題. *広島体育学研究*, 39 : 11-24.
- 水谷雅美・岡澤祥訓 (1999) 運動有能感を高めるリズム体操の授業実践. *体育科教育*, 47(13) : 57-59.
- Mirus, J., White, E., Bucek, L, E. and Paulson, P. (1993) *Dance education initiative curriculum guide*. Minnesota Center for Arts Education.
- 文部科学省 (2008a) 中学校学習指導要領. 東山書房, 京都府.
- 文部科学省 (2008b) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房, 京都府.
- 文部科学省 HP 諸外国の教育施策に関する文献調査報告書. (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo7/shiryo/07100513/008.html/2014年8月27日現在)
- 本村清人・戸田芳雄 (2003) 新しい課題に対応する中学校保健体育科のモデル 松本富子編. 明治図書, 東京都.
- 村田芳子 (2002) 最新楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス. 小学館, 東京都.
- 村田芳子 (2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?—学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ—. *体育科教育*, 56(3) : 14-18.
- 村田芳子・高橋和子 (2009a) 「表現・創作ダンス」内容の指導とポイント. *女子体育*, 51(7・8) : 10-11.

- 村田芳子・高橋和子 (2009b) 「フォークダンス」内容の指導とポイント. 女子体育, 51 (7・8) : 14-15.
- 村田芳子・高橋和子 (2009c) 「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」内容の指導とポイント. 女子体育, 51(7・8) : 12-13.
- 村田芳子 (2012a) 心と体をほぐし, ダンスの世界にスイッチ・オン!. 女子体育, 54 (8・9) : 6-7.
- 村田芳子 (2012b) 表現運動ーリズムダンスの最新指導法 よくわかる DVD シリーズ. 小学館, 東京都.
- 中村恭子 (2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 東京都公立中学校を対象とした調査から. 順天堂スポーツ健康科学研究, 1(4)通算第 16 号 : 472-485.
- 中村恭子 (2011) ロックのリズムで動くー止まる. 明日からトライ! ダンスの授業 DVD 付き 全国ダンス表現運動授業研究会編. 大修館書店, 東京都 : 94-95.
- 中村恭子 (2012) 移行期のアンケート調査から見えてきたダンス教育の展望と課題. 体育科教育, 60(2) : 18-21.
- 西田佳 (2010) 小学校 3 年生の「器械運動」で「わかる」はここまで深まる. 体育科教育, 58(1) : 40-43.
- 岡出美則 (1994) 「わかる・できる」学習の意義. 体育の授業を創る 高橋健夫編. 大修館書店, 東京都 : 128-142.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16(2) : 145-155.
- 岡澤祥訓・三上憲孝 (1998) 体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係. 体育科教育, 46(10) : 47-49.
- 朴京眞・村田芳子 (2011) 日本と韓国のナショナルカリキュラムにおけるダンスの内容の変遷に関する研究ー日本の学習指導要領と韓国の教育課程を対象としてー. (社)日本女子体育連盟学術研究, 27 : 39-53.
- Qualifications and Curriculum Authority (2007) Physical education programme of study for key stage3 and attainment target. (<http://www.qca.org.uk/curriculum/> 2014 年 8 月現在)
- 相馬秀美 (2011) 舞踊教育の現在. 芸術・民族・教育からのアプローチ. 遠藤保子ほか編. 文理閣, 京都府 : 263-276.
- 坂本秀子 (2012) 新学習指導要領対応 初心者から指導者まで使えるダンスの教科書. 成美堂出版, 東京都.
- 酒向治子・永田麻里子・猪崎弥生 (2014) 中学校女性体育教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心について. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 155 : 109-113.
- SAYAKA (2011) はじめてでもすぐ踊れる! ヒップホップ for kids. ヤマハミュージックメディア, 東京都.

- 清水大地 (2011) ストリートダンスにおける即興的創造過程. 認知科学, 19(2), 240-243.
- 下村和敏・山崎朱音・岡端隆 (2012) 体育授業における指導方法に関する研究—現代的なリズムのダンスにおける教材の再考—. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 20 : 53-63.
- 新開谷央 (2006) カリキュラムから見た表現・ダンスの「内容」の再考. 女子体育, 48(10) : 32-33.
- 鈴木裕子 (1999) 幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用—題材と言葉がけの違いの視点から—. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 21 : 157-170.
- 杉浦大介 (2011) 目標 8 時間!! 小学生のためのカッコカワイイなりきりダンス vol.2 ヒップホップ編. 民衆社, 東京都.
- 高橋健夫 (1999) 「学習指導要領(体育)」改訂の要点と今後の課題. 女子体育, 41(4) : 4-7.
- 高橋健夫 (2003) 体育授業を形成的に評価する. 体育授業を診断的・総括的に観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—. 明和出版, 東京都 : 12-15, 163-164.
- 高田康史 (2010) 中学校体育授業における「現代的なリズムのダンス」の学習内容に関する基礎的研究—ストリートダンスに着目して—. 平成 21 年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄 : 209-210.
- Toscano, L., Ladda, S. and Bednarz, L. (2014) Moving to the Beat: From Zumbato Hip-Hop Hoedown. Strategies: A Journal for Physical and Sport Educators, 27(2) : 31-36.
- Trout, J. and Zamora, K. (2005) Using Dance Dance Revolution in Physical Education. Teaching Elementary Physical Education, 16(5) : 22-25.
- 内山須美子 (2007) ストリートダンスの授業構成に関する研究. 白鷗大学論集, 21(2) : 265-291.
- 内山須美子・小倉翔平・根岸義克 (2011) 現代的なリズムのダンスの学習意欲に関する研究—学習成果と学習動機および学習ストレスとの相関—. 白鷗大学教育学部論集, 5(2) : 331-360.
- 内山須美子・山路学 (2012) 現代的なリズムのダンスの学習意欲・行為・有能感に関する研究. 白鷗大学教育学部論集, 6(1) : 67-90.
- 内山須美子・松尾健太・奥山美希 (2013) ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析—中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例として—. 白鷗大学教育学部論集, 7(1) : 71-108.
- 全国大学音楽教育学会 (2001) 幼児音楽教育ハンドブック. 音楽之友社, 東京都.